



Title	詩的隠喩に関する覚え書
Author(s)	森田, 繁春
Citation	Osaka Literary Review. 1982, 21, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25579">https://doi.org/10.18910/25579</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 詩的隱喩に関する覚え書

森 田 繁 春

## 0. 序

現代は変動の時代である。科学主義、物質主義は容赦なくわれわれの生活の中へ侵入し、物の価値を大きく変え、人間の思考の方法やことばにも影響を与えるようになってきている。世にクリスタル族やクリスタル作家が出現し、ラジオやテレビから流れてくる歌の文句はなんと味けないことか。人間のことばが本来持っていたはずの「あたたかさ」はどこへ行ってしまったのであろうか。かつてシェリーは「言語はそもそも隱喩的なものである」<sup>1)</sup>と述べて、ことばの持つ豊かな創造力を強調したが、今日、このような変革の時代であればこそ、創造性の学問としての隱喩論は他の時代以上に待望されている。

雑誌『現代思想』1981年5月号が「メタファー」の特集を組み、幅広い分野からの叢智を求めんとしているのもこういった時代の要求に答えようとしたものであったと思う。

## 1. 言語と思考の隱喩的側面

ことばの「隱喩性」を論じるには、われわれの認識の方法についての議論から始めねばならない。われわれは物理的事実をどのように認識し、ことばとして具現するのであろうか。今、われわれの眼前に赤電話があるとし、それを見て「その電話は赤い」と言い、またそれに触れてみて「表面はすべすべしている」と言う場合を考えてみよう。そのように言う時、われわれは物理的事実を正確に記述していることになるであろうか。結論から先に言うと、答えは否である。なぜなら、その電話は、光線の具合によってはピンクにみえたり、ひよっとすると白っぽくみえたりすることもあるで

あろうし、また見る位置が違えば全く同じ色にみえるなどということはありませんからである。同様に、それに触れてみて、すべすべしていると感じる人もいれば、ほこりっぽくザラザラしていると感じる人もいるだろう。この場合、われわれは視覚や触覚のような感覚与件 (sense data) を用いてそれがあたかも電話の本性であり、物理的な事実であるかのように言っているわけであり、そこには認識の飛躍があり、ことばの短絡がある。すなわち、われわれは私的空間を物理的空間に投影するという形の還元化を行っているのである。2つの電話を、一方が「赤」、他方が「黄」と記述する場合も同じであって、その場合には、われわれは物理的空間にも視覚における「赤」対「黄」のような対応があると仮定しているのである。このことは自然科学や医学で使われる用語についても言えることである。たとえば、医学の分野では、心臓の活動を視覚化、空間化し「心電図」として記録するが、実際には、物理学的な意味においてわれわれの体内に電線の中の流れと同じ流れが存在するわけではないであろう。それどころか、「電流」や「電波」という用語そのものが、物理的な事実を、浜辺に寄せる「波」や川の「流れ」のような、われわれの視覚が私的空間内で捉えることのできる運動（動き）に還元しているのである。<sup>2)</sup> このような還元作用こそ人間のことばの本質であり、それゆえに、シェリーの言うように人間のことがが隱喩的でありうるのである。

われわれの言語習慣が無意識のうちに認識に影響を与える過程を、英語とホービ語との比較を通じてより厳密に論じた画期的な研究が、ウォーフ (1939) である。彼は SAE (Standard Average European) にみられる隱喩的性質についての議論の中で、たとえば、英語で物を数える場合の2つの表現、“ten men” と “ten days” を比較すると、前者が経験によって客観的に理解できるのに対し、後者は空想的な知覚にすぎない (P.139)、それにもかかわらず同一の表現形態をとるという事実や、「時制」の捉え方に関して、人間の意識の中では感覚や記憶、予見といったものが混然一体となっているにもかかわらず、視覚や聴覚や触覚によって把握できるものを

「現在」、記憶として残っている非感覚的な心的映像の世界を「過去」、信念とか直感とか、その他不確定の領域を「未来」と名づける (pp. 143-4) という事実を「客体化」という概念によって説明している。さらに、非空間的なものを空間的なものに見たてて、持続を long (長い) とか short (短い) とか言い、強度を heavy (重い) とか light (軽い) のように言う (p. 145) のも客体化の一種であると捉え、それを「空間化」<sup>3)</sup>と呼んでいる。彼が言語と思考のかかわりの観察を通して得た結論は、ある意味では思考の混乱ともいえるそういった SPA の言語習慣が「形式」+「質料」という形で事実を捉える独特の2項的思考法を生み、また、共感覚にもとづくヨーロッパの芸術の下地になっている (p. 156) ということである。

彼によれば、ヨーロッパの言語の場合、このような隠喩的思考法はラテン語<sup>4)</sup> 以来の根強い伝統 (pp. 156-7) なのであるが、そのことはなにもヨーロッパ語に限ったことではない。わが国の多くの研究者たちが、古代日本語の持っていた豊かな詩性に言及している。たとえば、西郷 (1964) は万葉集のことば<sup>5)</sup> には「言と事とが等価であり、呪文の力で自然を直接的に支配し変えようとした原始社会の伝統がみられる」 (p. 32) という。原始のことばの持っていたこのような豊かさは、しかし、怪物の如き現代社会の中ではいわば眠っている。眠っている詩性を呼び戻す使命が詩人にはある。詩人は言語の課す制約にせいっぱい抵抗しつつ、時には暴力的と思えるやり方で、古代人の持っていた霊的な小宇宙を再創造しようとする。よく言われる現代詩の晦渋性は初源のことばに戻ろうとする詩人たちの、いわば「あがき」の指標である。その回帰の過程に「隠喩」がある。詩的隠喩の研究が、詩のことばの研究であると同時に人間のこころの創造性研究でもありうるゆえんである。

隠喩論の今日的意義を以上のように捉えた上で、われわれは、次に現代の隠喩論の輪郭を得たいと思う。

## 2. 現代隠喩論の輪郭

創造的理論としての隱喩論の流れを把握するためにどうしても避けて通れぬ人物を3人あげるとすれば、それは、アリストテレス、リチャーズ、ヤコブソンであろうと思う。

アリストテレスは『詩学』において隱喩の本質が「異なるものの中に類似のものを見出すこと」であることを見抜いた人物としてあまりにも有名である。枝葉にわたる議論を別にすると、今日行われているあらゆる隱喩論の基礎にはこのアリストテレスの原理があると言ってよく、その意味では彼は隱喩論の父である。

リチャーズは『修辞学原論』において、隱喩を、主題とかかわりを持ち隠された観念である「主意」(tenor)といわば隠れ蓑の形で主意を運ぶ「媒介」(vehicle)の2つの要素に分け、それらの相互作用によって隱喩の機能を説明しようとした。彼の方法は文脈という観点から隱喩を論ずる契機となった。

ヤコブソンは「言語の2つの面と失語症の2つのタイプ」と題する論文の中で、「隱喩」と「換喩」をそれぞれ範列軸と連辞軸とに位置づけ、さらに「言語学と詩学」においては「詩的機能は等価の原理を範列軸から連辞軸へと投影する」(p. 358)という原理を掲げて詩的メッセージの特殊性を理論化した。

彼らの学説は先駆的であったがゆえに、また、彼らの概念の提示の仕方があまりにも奇抜であったがゆえに、学界に論争の渦を巻き起した。しかしながら、それが現代隱喩論の「たたき台」であり、しかも、鉄のたたき台であることを否定することはできない。3つの説のうち、隱喩論の大前提とも言うべきアリストテレス説はいわば別格であって、詩に関する現代の語学的理論の底流には、大ざっぱな言い方をすると、詩を詩たらしめているもの(詩性)の解明をめざすヤコブソンの構造主義的アプローチの流れと、詩的表現のもたらす価値や効果といった観点から文芸批評的アプローチを行うリチャーズの流れがある。ここでは主としてヤコブソン説について、その問題点を検討することにする。

ヤコブソン説できまって問題となるのは、彼が与えた「詩—隠喩—範列軸—類似関係—選択(置換)」「散文—換喩—連辞軸—隣接関係—結合」という図式である。とりわけ、詩=隠喩、散文=換喩という単純化をめぐる論争は、時には誤解を伴いながら、くり返されてきた。そうして現時点では「メタファーの相互作用が新しい実体を形づくるという見解にもう少し近づき、真面目に取りくんでみると、いかなるメタファーも同時にメトニミーであると結論せざるを得ない」<sup>6)</sup> という形でいちおう収束しているように思える。詩の中の比喩の機能が多重的であり、一見全く異なる性質を持つようにみえる比喩と比喩の関係が不即不離のものであることを知るための格好の材料を、リュウエ(1963)の提示するボードレルの詩の分析が与えてくれる。

Je suis la plaie et le couteau !  
 Je suis le soufflet et la joue !  
 Je suis les membres et la roue,  
 Et la victime et le bourreau !

僕といふこの人間は、<sup>てきず</sup>手傷であって<sup>かた</sup>刀なのだ！  
 打つ手であって頬っぺただ！  
 轆かれる手足、轆く車輪  
 斬られる囚徒、斬る刑吏！

(堀口大学訳)

リュウエの分析によれば、etで結ばれる8つの名詞の関係は意味的には次の2つのグループにまとめられる。

{行為者} couteau (刀)→soufflet (打つ手)→roue (車輪)→{bourreau (刑吏)}

{被行為者} plaie (手傷)→joue (頬)→membres (手足)→{victime (囚徒)}

上段は提喩的連関であり、下段は換喩的連関である。なるほど、彼の指摘に間違いはないが、今一度検討してみると、前者の場合、行為するもの(痛みを与えるもの)に対する4つの名詞の関係(すなわち、部分と全体との

関係)は確かに提喩であるが、同時に、個々の名詞の間の関係(すなわち、部分と部分の関係)は換喩であるとも言える。部分をもって全体をあらわす提喩の機能は、同時にわれわれに部分と部分の関係への注意を喚起するのである。ここに提喩と換喩の機能の重なり<sup>7)</sup>がある。さらに、提喩の全体から部分へ向う還元の図式は、隠喩の「事項間の同一性、類似性に目を向けさせながら同時に差違性を強調する」という機能と基本的に同じものであると考えれば、結果的には隠喩と換喩の機能が重なる<sup>8)</sup>とも言えるのである。このように、詩と散文に隠喩と換喩を結びつける方法はエレガントではあるが誤解を招きやすい。むしろ、われわれは両者の違いをドウラス・フィリオレ(1973)に従って「散文には隠喩過程を展開するのに十分な時と場所があるが、詩では、形式上の拘束、制約によるシニフィアンの干渉が隣接関係を促進し、あるいは強制する。その隣接関係が支離滅裂な文彩を生み出す。」(邦訳, pp. 297-8)というような形で整理をしておいた方が得るところが大きいと思う。筆者は、詩的メッセージとは「構造の枠の中で消去された深層を再活性化させるように提示された表現形態」と捉え、その際、「深層を回復しようとする努力、その過程が隠喩論の本質である」と捉えたい。従って、詩とは、文学作品という形に詩人自身の心情を託し、読者に解釈を要請する言語芸術であるということになる。ここに深層構造回復の理論(隠喩論)は解釈学との協力を迫られる。リチャーズを柱とする文芸批評的方法とヤコブソンを柱とする言語学的方法は相補的に合体するのである。

### 3. 隠喩と真理性

これまでみてきた隠喩論の展開の中で、なお残されている重要な問題は、隠喩と現実との対応の仕方、すなわち「指示」の問題である。われわれが詩を読むとはどういうことであるのか。詩の中の逸脱文を読みとる機構はどのようなものであるのか。現実と詩とをつなぐこういった問題を、主として哲学の分野における発話行為の研究との提携のもとに論じようとする

新しい流れが存在する。

ソーン (1970) はカミングズの詩の中の “he danced his did”<sup>9)</sup> やダンの詩にある “I am every dead thing”<sup>10)</sup> といった特異な文を解説する機構を説明するために、詩の言語を日常言語とは違う体系を持つ1つの言語と捉え、詩に固有の文法<sup>11)</sup>を提唱した。レヴィン (1976; 1977) はオースティン (1962) の理論を応用し、隠喩の possible worlds 内における真理値を論ずることにより、詩と現実の間隙を埋めようとした。<sup>12)</sup> レヴィンは一般に逸脱には “He is a married bachelor.” 型の論理的矛盾と “The square is round.” のように人間のイマジネーションの力で解決できる意味的不整合の2種類があるが詩中の逸脱には後者が多いということ指摘した上で、次のような枠組を提示する。

「詩は擬似的発話行為 (quasi-speech act) であり、その深層には “I imagined (myself in) and invite you to conceive a world in which. . . .” という誘引力 (illocutionary force) を持つ文が存在する。<sup>13)</sup>」

詩人は、上掲の文の持つ力により現実の自分 (I) の分身 (myself) をイマジネーションの世界へ投影し、かつ、読者を詩の世界へ誘う。読者は、その文の効力 (perlocutionary effect) によって、誘われるままに詩の世界へ運ばれる、というわけである。ここで世界を創造する特殊な遂行動詞 (world-creating performative verb) の介入が、現実世界における指示関係を無効にする。われわれは詩人を信ずる以外にないのであるから、そのような発話行為が要求する適格性条件 (felicity conditions) などを問題にしてみても無駄なのである。すなわち、詩中のあらゆる文の真理値は必ず真となる。

このような理論が有益なものであるかどうかは、ひとえに、それがわれわれの現実世界と詩的世界 (空想的世界) のかわりに関する直観にかなっているかどうかにかかっている。われわれが詩の中の逸脱文を解釈する際には、実際には2重読みを行っている。1つは現実世界に生きるわれわれの規準に照らし合わせた解釈であり、もう1つは詩の世界の一員として

の詩的解釈である。ここで忘れてはならない付帯条件が付く。詩的解釈には現実世界との類似性、差違性の検討が必ず伴う、ということである。ダンが「ぼくはすべてのものの墓になった」と言い「ぼくは死に絶えしすべてのもの」<sup>14)</sup>と言う時、また、ディキンソンが「1 + 1は1である」<sup>15)</sup>と言う時、われわれは「現実世界の墓」「現実世界の死者」「現実世界の加算規則」との照合なしにその文を解釈することはできない。そもそもわれわれが詩的逸脱を隱喩とみること自体が「現実との関係において隱喩と解する」ということに他ならないのである。われわれが辞引を片手に、ねじりハチマキで詩を読んでいるうちは、いわば「素人読み」の段階であり、本当に詩を味わうことができない。逆に、詩の世界に完全に没入し、詩人の宇宙をわれわれ自身のものとすることができたとすれば（これは「玄人読み」）、隱喩を発見することができない。まことに奇妙なパラドックスが生じるのである。ダンやカミングズのように日常語と詩語のあいだにはっきりとした落差のある場合には照合はむしろ容易であるが、たとえば、トマススの「ロンドンのある子供の焼死を悼むことを拒む詩」<sup>16)</sup>の中の「子供」「ロンドン」「テムズ河」のように現実の事件を現実の地名を用いて詩に表現する場合の照合はどうなるのか。「それはふつうの叙情詩ではない」とか「詩は完全にイマジネーションの産物であるが、いくつかの現実世界の素性が詩の世界へ移される」<sup>17)</sup>と言って、簡単に片づけてしまってよいものであるのか。また、われわれは、これまで疑いを抱くことなく、ひたすら、世界を変えることにより詩的逸脱を解明しようとしてきたのだが、前述のような言語が思考に与える影響を考慮した場合、その逆の「言語を世界に合うように変える」という行き方が間違っているとはいきれるのか。<sup>18)</sup>

#### 4. 結 び

逸脱文を研究するものが、時折、必ず襲われる疑念を晴らそうとすれば、再度、隱喩の定義を思い出す他はない。隱喩は単なる「技法」ではなく、「過程」であった。詩人が逸脱をもって既存の言語秩序に——そして読者

に挑戦する過程。読者が作品と詩人に関するすべての知識を駆使して詩を解読しようとする過程。魔術的、霊的な初源の世界をめざす詩人、読者一体のなり振りかまわぬ道行き、あがき。そこに生じる秩序の破壊と再構築、それが隠喩のエネルギーであった。詩人自身がことばと格闘する姿を次の2つの詩は鮮明に映し出している。

On no work of words now for three lean months in the bloody  
Belly of the rich year and big purse of my body  
I bitterly take to task my poverty and craft :

To take to give is all, return what is hungrily given  
Puffing the pounds of manna up through the dew to heaven,  
The lovely gift of the gab bangs back on a blind shaft.

To lift to leave from the treasures of man is pleasing death  
That will rake at last all currencies of the marked breath  
And count the taken, forsaken mysteries in a bad dark,

To surrender now is to pay the expensive ogre twice.  
Ancient woods of my blood, dask down to the nut of the seas  
If I task to burn or return this world which is each man's work.

(Dylan Thomas)

言葉の仕事が一つもないのでゆたかな年の元気のよい腹と  
私の肉体の大きな金入れの中になら  
やせた三月<sup>みつ</sup>のあいだ  
私は私のまずしさとわざを叱りつける

あたえるためにとることがすべてだ  
飢えながらあたえられるものをかえしてやれ  
めぐみの露をどっさりと露を通して天に吹きかえせ  
そしたらおしゃべりといううつくしい才能が  
めくらのかじ棒の上にはね返るだろう

人間の遺産からはなれるために人間の遺産をぬすむ  
それは容易な死だ

つまり評価の定まった息の通貨をさがしまわり  
うけとってすぐに見すてた創造の神秘を  
わるい闇の中でかぞえることだ

才能の放棄は高価な悪鬼に二度支払うことだ  
私の血の古くさい森なんぞ  
一人一人の仕ごとの世界であるこの世を  
もし私が焼きすてるかこの世にそのまま返すだけなら  
海のまん中にたたき捨てよ

(羽矢謙一訳)

Shall I take thee, the Poet said  
To the propounded word?  
Be stationed with the Candidates  
Till I have finer tried —

The Poet searched Philology  
And was about to ring  
for the suspended Candidate  
There came unsummoned in —

That portion of the Vision  
The Word applied to fill  
Not unto nomination  
The Cherubim reveal —

(Emily Dickinson)

提案された語に向って詩人は  
「この語を採用しようか」と言った。  
私をもっと精密にためてしまうまで、  
候補者を位置につかせておいて下さい。

詩人は辞引をさがし、  
懸案の候補者を呼ぼうと  
鈴をならそうとした、その時  
呼ばれもしないのに入って来たのは

幻想の一部。

その語はそれに当てはまり充たした。

それは名称ではなく

天の啓示するものに。

(加藤菊雄訳)

こういった詩人の苦悩を讀者自身が体験する方法は、作品の地道な分析以外にはない。「文学作品の意味はその作品の構造の中にあり、その外延はその作品が提示する世界の中にある」<sup>19)</sup>というリクール (1975) の指摘は、それゆえ示唆的である。locutionary, illocutionary, perlocutionary という発話行為の3つの側面が詩分析の中で、それぞれ、「言語構造の研究」「詩人の作詩意図の研究」「詩の讀者に与える効果の研究」として結実しない限り詩的隠喩論の未来は暗い。

#### 注

- 1) Shelley の『詩の擁護』の中の言葉。Richards (1936), p. 90 に引用されている。
- 2) Russell (1912), chaps. I-III 参照。
- 3) Whorf (1939), p. 146 は非空間的な場面に対する物理的な隠喩の例として次のような英語の表現をあげている。  
I “grasp” the “thread” of another’s arguments, but if its level is “over my head” my attention may “wander” and “lose touch” with the “drift” of it, so that when he “comes” to his “point” we differ “widely”, our “views” being indeed so “far apart” that the “things” he says “appear” “much” too arbitrary, or even “a lot” of nonsense!
- 4) Whorf (1939), pp. 156-7 によれば, educo (教育する), religio (信心), principia (原理), comprehendo (理解する) などの形成に lead out (導き出す) とか tying back (結び直す) のような物理的な概念の隠喩的適用がみられるという。
- 5) 西郷 (1964), pp. 24-5 は万葉集の中の「たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野」という歌の枕詞「たまきはる」の持つ豊かな情緒性を指摘している。枕詞に関する同様の指摘は増井 (1979), pp. 38-43 にもみられる。

- 6) Sapir (1977), 足羽訳, 第9巻第6号, p. 178 参照。
- 7) 同上書, p. 177 参照。
- 8) Sapir (1977), 足羽訳, 第9巻第5号, p. 133 参照。
- 9) e. e. cummings の “anyone lived in a pretty how town” で始まる詩の一節。
- 10) John Donne の “A Nocturnal upon S. Lucies Day, being the shortest day” と題する詩の一節。
- 11) Thorne (1970), p. 189 参照。
- 12) Levin (1976) は, 詩的逸脱文の真理値の扱いは, Frege が形式言語の解釈において示した方法に基づくものである (p. 122) こと, Austin の方法を最初に文学に適用したのは Ohman である (p. 146) こと, を付記している。
- 13) 深層における文の存在については Ross (1970) 参照。ただし, Levin (1976) は疑問やリクエストで始まる詩には若干の修正が必要であること, illocutionary force が明示されている詩もある (p. 150) こと, を認めている。また, このような方法の適用は叙情詩に限る (p. 155) と言う。
- 14) Donne の前出(注10)の詩の一節。原文は, それぞれ, “I, by loves limbecke, am the grave / Of all, that's nothing.” “For I am every dead thing,”。
- 15) Emily Dickinson の “One and One — are One —” で始まる詩の冒頭。
- 16) Dylam Thomas の “A Refusal to Mourn, The Death by Fire, of a Child in London”。
- 17) Levin (1976), p. 157 参照。
- 18) Kuhn (1979), 富山訳, p. 89 参照。
- 19) Levin (1977), p. 125 参照。

#### 参考文献

- Austin, J. L. (1962). J. O. Urmson ed. *How to Do Things with Words*.  
Harvard University Press.
- Culler, J. (1975). *Structuralist Poetics*. Routledge and Kegan Paul.
- Delas, D. and J. Filliolet (1973). *Linguistique et Poétique*. Librairie Larousse.
- 田村毅, 広川忍訳(1976), 『詩の言語学』朝日出版社。
- Jakobson, R. (1956). “Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances,” in R. Jakobson and M. Halle, *Fundamentals of Language*. Mouton.
- Jakobson, R. (1960). “Linguistics and Poetics,” in T. A. Sebeok ed. *Style in Language*. The MIT Press.
- Kuhn, T. S. (1979). “Metaphor in Science,” *Metaphor and Thought*.

- Cambridge University Press. 富山太佳夫訳(1981), 「科学における隠喩」『現代思想』第9巻第5号。
- Levin, S. R. (1973). *Linguistic Structures in Poetry*. Mouton.
- Levin, S. R. (1976). "Concerning what kind of speech act a poem is," in T. A. van Dijk ed. *Pragmatics of Language and Literature*. North-Holland Publishing Company.
- Levin, S. R. (1977). *The Semantics of Metaphor*. The Johns Hopkins University Press.
- 増井元(1979). 「和歌様式の構造」古代文学会編『想像力と様式(シリーズ古代の文学4)』武蔵野書院。
- Richards, I. A. (1936). *The Philosophy of Rhetoric*. Oxford University Press.
- Richards, I. A. (1974). *Poetries: Their Media and Ends*. Mouton.
- Ross, J. R. (1970). "On Declarative Sentences," in R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum eds. *Readings in English Transformational Grammar*. Ginn.
- Russell, B. (1912). *The Problems of Philosophy*. Oxford University Press.
- Ruwet, N. (1963). "L'Analyse Structurale de la Poésie," *Linguistics* 2: 38-59.
- Sapir, J. D. (1977). "The Anatomy of Metaphor," *The Social Use of Metaphor*. University of Pennsylvania Press. 足羽与志子訳(1981), 「メタファーの解剖」『現代思想』第9巻第5号及び第6号。
- 西郷信綱(1964). 『詩の発生(文学における原始・古代の意味)』未来社。
- Thorne, J. P. (1970). "Stylistics and Generative Grammar," in D. C. Freeman ed. *Linguistics and Literary Style*. Holt, Rinehart and Winston.
- Whorf, B. L. (1939). "The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language," in J. B. Carrol ed. (1956), *Language, Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. The MIT Press.